

JRに運休や遅れ

イザベラ・バード秋田の旅（4）雄物川編

2018年4月29日 掲載



秋田入りする前から、イザベラ・バードは一つの計画を立てていた。県南から久保田（現秋田市）まで、雄物川を使って舟で行くことだ。地図を見て、人力車や馬で羽州街道を北上するより、舟で下った方が時間短縮になると判断したらしい。なかなか舟が入手できなかったが、バードはこう言って諦めようとしなかった。「この道に行く、他の道は行かない」（金坂清則訳注「完訳日本奥地紀行」）

かつての川はまさしく道だった。秋田歴史研究会の菅原忠会長（68）＝秋田市新屋＝は「当時の雄物川は物流の大動脈。大小さまざまな舟が行き交っていただろう」と話す。

藩政時代に穀倉地帯の県南から年貢米を運ぶルートとして発達した雄物川は、明治に入っても用いられた。米は土崎へ運ばれ、そこから大阪などへ。土崎からの帰りの舟は海産物や日用品を乗せ上流へ。支流の横手川、玉川、岩見川などを合わせた物流網は県南の隅々に及び、「雄物川の河川交通」（斎藤實則著）によると川筋の船着き場は約120カ所、浜宿や浜倉がある川港は約30カ所に上った。



1878（明治11）年7月22日、神宮寺（現大仙市）の舟乗り場は黒山の人ばかりだった。視線の先にいるのはバード。小さな平底舟をチャーターし、約60キロ下流の久保田に向けて出発しようとしていた。

バードが舟を手に入れた神宮寺は川港の一つ。玉川との合流地点にあり、舟運の結節点であるとともに雄物川有数の難所として知られていた。神宮寺の歴史に詳しい地元の佐々木昭元さん（86）は「この辺りの雄物川は流れが速く、本流から直接舟には乗れなかっただろう」と語る。乗船場所の可能性のあるのは、すぐ北を流れる後川。ここから乗れば間もなく本流に出る。

雨の翌日だったが、旅は平穏だった。やがて舟は新屋（現秋田市）に到着。そこからは本流（現秋田運河）を外れ、「狭くて水の色が緑色」の川に入った。秋田市中心部を流れる旭川だ。

「雄物川往来誌」（佐藤清一郎著）によると藩政時代、旭川には馬口労町（現同市旭南）など複数の船着き場があった。バードが舟を下りた場所は不明だが、到着の喜びをこう記している。「陸路だったら2日の長旅になったところを、わずか9時間で楽々走破できた」（「完訳日本奥地紀行」）。天候に恵まれず、トラブルも多かった秋田の旅の中で、雄物川下りは爽快な出来事だったようだ。



バードの旅を支えた舟の道。だが1905年、奥羽線開通を機に雄物川水運は急速に衰退していく。38年には治水目的の雄物川放水路が完成。雄物川は大きく流れを変え、新屋から直接日本海に注ぐようになった。

© 2019 Akita Sakigake Shimpō